

書評

柏木義雄著

『クロノスの日曜日』

島田修三

現代人の時間と空間とを短縮する〈速度崇拜〉の根底に、それが単に〈生の量的増大〉をもって過去のどの時代よりも現代が優越している証しであり、過去の一切が矮小に過ぎないとする度しがたい傲慢があるとは見抜いたのはスペインの哲学者ホセ・オルテガ・イ・ガセーであった。オルテガはその名著『大衆の反逆』（一九三〇年刊）の中で、そうした現代人の傲慢を指摘し、しかし実は現代人が「（時代の）理想を実現する途方もない能力はおびただしくもっていると思つているのに、いかなる理想を實現していいかわからない」状態にあり、「自分の豊富さのなかで、途方に暮れ」「かつてないほどの、資産、知識、技術をもっているのに、かつてないほど不幸な時代」のただ中に浮遊しているに過ぎないと述べる。また〈速度崇拜〉者でもある〈進歩主義者〉たちも「計画も予定も理想も」ないにもかかわらず「未来には驚きも秘密もなく、重大な事件も革新もないと確信し、また世界は、迂回もせず、あともどりもせず、ただまっすぐな道を進むだろうと思ひこんで、未来への不安を追いはらい、不変の現在にあぐらをかいている」だけなのだという。オルテガはこうした未来への明確な〈理想〉もないままに、ただただ〈速度崇拜〉によつて自らの〈生の量的増大〉をはかり続ける現代人が「退歩、野蠻、没落も可能である」とも自ら予感しているに違いない、と述べるのである（以上の引用は寺田和夫訳『大衆の反逆』による）。

オルテガが対象とする現代人とは、いうまでもなく一九三〇年代初頭の欧米人を指しているのであるが、とめどもなく拡大する大衆・技術・消費社会化状況に覆われた現代日本を考えると、この社会には彼の指摘がいまだに有効である。と私には思える。確かにわれわれ日本人の現在にはかつてないほどの〈生の量的増大〉がもたらされ、それを支える合理主義・機能主義・生産主義という名の〈速度崇拜〉が跋扈してやまない。明確な〈未来〉への〈理想〉など、どこを探しても出て来ない。それがこの社会の近い将来における「退歩、野蛮、没落も可能」な状態を用意しているのではないかということ、心のどこかでうすうす感じてもある。われわれはもしかすると実に「不幸な時代」に生きているのかも知れない。

柏木義雄が『クロノスの日曜日』において緊密で詩的な文体を駆使しながら語りかけている対象は、こうした〈生の量的増大〉状況に流されている現代日本人のひとりひとりであるといつてよいかと思う。本書の構成は大きく二部に分かれており、前半が「伸びやかな時間」、後半が「失われゆく風景」と題されている。それぞれ長期にわたって主として新聞に発表した比較的短い文章が収録されているが、どれもほぼ変わらないテーマによって貫かれており、著者の問題意識が長期にわたって風化することなく、むしろ深く凝縮しつつ鋭い一点に収斂していく過程を示しているといえるだろう。

「伸びやかな時間」を貫くテーマは、われわれの生の内側を、あるいはその傍らを、またはるか遠くを流れゆく〈時間〉である。そこで著者は、〈時間〉の人間の側への奪回、生き生きとした人間的〈時間〉の実現への庶幾を語る。冒頭の「裂けた時間の回復」という文章は、いわば〈速度崇拜〉の側を流れる時間によって管理され、疎外され、そして引き裂かれてしまったわれわれの懐かしい原初的〈時間〉への憧憬を記したものである。ここで著者は〈速度崇拜〉の側を流れる時間に対して「いつも遅れてやって来たものの位置に甘んじ」なければならぬ現代人の不幸に触れているが、これを

例えば「落ち葉の季節」という文章の「私たちが願うのは、早く着き過ぎた駅で時間をもてあましている貧しい旅人にはなりたくない、ということである」といった一節と読み合わせれば、著者の姿勢はおのずから明らかだろう。またミヒヤエル・エンデの『モモ』に登場するアレゴリカルな〈時間どろぼう〉に触れた「時間の深み」においては、「自ら内部へ取りこんだ時間は、それが悲しみにしる喜びにしる、かけがえのない「私自身の時」として、そこに燃えあがった生命に照り映えているものなのであろう」とも述べており、また「いづち行くべき」という文章では、「増大するレジヤールという時間を費すための、広大な遊楽地域を開発するために」木々が生い茂り、鳥獣の棲息する山を一夜にして平地にしてしまうという現代日本を象徴する愚行を静かに嘆いているが、これらも著者の姿勢を端的に語るものといえよう。

著者は「遅れてやって来たものの位置に甘んじ」ることが〈生の量的増大〉の論理に立てば、不幸に見えるというだけのことだ、と低く呟いているようなのである。そういえば、「二つの虹」という、忘れたいエピソードを記す一文があった。東京の国電（昭和四十五年当時）に著者は乗っていた。時刻は夕方、著者は疲れていた。隣りに泥だらけ、汗まみれの土木作業員風の若い男が乗った。その男が都会の空にかかる淡い虹を見て、誰に告げるともなく「虹が出てるよ」と言った。やがて下車しようとする男に著者は「どうもありがとうございます」と告げたというのである。ここで著者が語るうとしているのは、〈生の量的増大〉の方向に流れゆく〈時間〉ではなく、その〈質的豊饒〉をもたらず〈時間〉についてであり、それがたとえ日常の一瞬でも人間はそういう〈時間〉を糧にして生きるのだ、ということではないか。「何ものにも意味づけられず、それでいて、たつぷりとした生命の喜びを感じていられるような時間」（伸びやかな時間）のことである。

後半の「失われゆく風景」は、「伸びやかな時間」で語られた〈生の質的豊饒〉に向かう〈時間〉論をベースにした文明批評といった趣をもつ。そこには尖ったクリティシズムよりも、むしろ現代日本への寓意と愛惜にみちた著者の思

いが滲むのである。「団欒」「大きな柱時計」「家の中の闇」といった文章は実質的にはほとんど崩壊の危機に瀕する日本の家庭を題材としたもので、かつての家族を濃密な共同体として成立させていた様々な要素や構造について深々とした思惟をめぐらしている。「新しい時代の日ざしが、家族の顔つきを変え始めた。家の中央の柱で、〈みんなの時間〉を告げていた古い時計もなくなった。それは大きな八角時計で、家族の中心であった」(「団欒」といった叙事詩のような数節などからは、われわれの失ったもの、あるいは失おうとしているものが何であるのか、そしてそれがどんなに輝いていたか、ということをあためて思い知らされるのである。また「不ぞろいの素材」という文章では、あの見事に調和的なたたずまいを見せる法隆寺の千三百年を支えたものが、材質の不揃いな木材であることを語り、また現代の均質で頑丈なコンクリート建造物の意外な短命を語り、そのうえで〈個性尊重〉を掲げる現代教育について言い添えるのであるが、こうした著者の目には、現代日本社会の「過去の一切が矮小に過ぎないとする度しがたい傲慢」の脆弱な本質が明らかに見えているのである。

「機を織る」「手仕事」のような文章を読むと、〈生の質的豊饒〉というものが実はこうした身体的経験と熟練との中で静かに醸成されていたという事実に思い到る。「今でも織物や編み物にいそしむ人たちの詩歌を見ることがある。夫や子、あるいは恋びとへの思いを、言葉にこめるよりもっと深くいちぢずに、糸を扱う指先にこめていることが表現されている。花を織り、小鳥を編むことで、愛を抱いている人々は花をささげ、空に羽ばたくことができた」(「機を織る」といった詩情のただよう口調で著者は失われてゆくものへの抑えがたい愛惜を語り、「不幸な時代」を生きなければならぬ現代日本人を見つめるのである。「市電」「貴夫人C571」「廃駅」といった文章もほぼ同じトーンで語られており、「市電が廃止された時、不便だというのではなく、要領はよくないが信頼のあつい隣人を奪われた思いがした」(「市電」)。「これらのローカル線は、毎日私たちが通いつづける通勤線路とは違う方へ走っていた。それは例えば魂の裏側の陰に

沿っていくようだった」「(廃駅)」といった一節を読むと、新時代の合理化によって消え去った懐しいこれらの事物が、今もわれわれの心の深い壁に痛みとして息づいていることに気づかざるを得ない。

末尾に置かれた「ゆめ」という文章で著者は「停車場も終着駅も見えていて、終着駅に降り立つ自分の後ろ姿も。ゆめは描きにくくなった。若ものたちは、スポーツカーを乗りまわす、長期ローンをひきずって、まだやってこない時間をエネルギーとして燃やしながら。未来を燃えかすことによって、やがて燃えかすの時間を迎えるために、“今”を忙しく費やす」と述べながらも、なおかつ「始業前、ロボットが準備体操する時代に生きて、若ものにはその魂にふさわしいゆめがあるはずだ」と彼らへの庶幾を語る。これは「アイスキュロスと共に、私たちは信じていたい、たとえ一時的に不完全なことがあるうとも、人間には見え難い浄化の日月を重ねながら、地球は完全へ向かって回転しているのだと」「(手の行方)」といった〈未来〉への必死の祈りのような視線と重なり合うものだろう。そこには著者が寄せた人間への篤い信頼がうかがわれると同時に、ひりひりするように緊迫した切ない意志をも私は感じるのである。

(一九八九年一月二三日、国文社刊、A5変形版・二〇三ページ、二〇〇〇円)

(しまだしゅうぞう・助教授)